

ChatGPTによると、2024年10月の大分県平均気温は約22°。ここ10年の平均は約20°とのことで、今年は残暑が厳しく、なかなか金木犀の香りを感じられないまま暦上の“秋”に突入した。半袖ジャケットを羽織り、10月12日土曜日、わたしたちは別府大学の構内にいた。

今年で3年目を迎えた、大分県教育庁委託事業「商業系高校生によるインバウンド向け観光ツアー企画」これは、別府市を舞台にインバウンド観光客の立場にたって、より魅力的な観光ツアーを企画するもので、県内商業系高校に通う約40名の高校生が参加した。高校生は学校や学年を混ぜた8グループに分かれ、高校生と観光客の橋渡し役をする「留学生」とグループディスカッションを伴走する「メンター」とともに、9月28日29日に観光にまつわるインプットセミナーを受講し、実際に活動費をもって自由に別府市内でフィールドワークを行った。フィールドワークで得た課題や観光客へのインタビューをもとに、10月12日の提案審査会まで、オンラインでディスカッションや資料作成を進め、8つのグループがそれぞれ独自の視点と工夫を凝らしたプランを準備した。

審査会当日、各グループは緊張感に包まれながらも自信に満ちた表情でプレゼンテーションを行い、5分間の持ち時間で自分たちのプランに対して、熱意を伝え切った。5名の審査員（大分県教育庁渡邊司指導主事・株式会社日本旅行本田享久大分支店長・別府溝部学園短期大学安藤美和子特任准教授・株式会社大分放送多田周司ラジオ営業部長・ONEBEPUDREAMAWARD2023ファイナリスト ウィジェシニング・アラクチ・アラビンダさま）からの鋭い質問にも果敢に答えようとする姿が印象的であり、初日のオープニングではまだまだ自信なさげだった表情が、頼もしさを漂わせていた。

特に、海外では神格的意味合いのある“タトゥー”と、日本文化の“箸”を融合させ、観光客と日本人の文化交流プランを作成したグループには恐れ入った。アンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）に気づき、解消するための観光プランを練り上げていたのだ。「異文化を知ることで偏見をなくし、相手をリスペクトしたい」そうプレゼンテーションする高校生の輝かしく前向きな言葉は、わたしにとっても新たな学びとなった。

メンターや留学生の意見に耳を傾け、違う視点を吸収しアイデアを磨くその姿勢は、大人顔負けの柔軟性だった。客だけの「消費者」ではなく、貴重な体験を提供すべき「共感の対象」として捉えようとしていることに、未来への希望を強く感じた。ただ同時に、彼らにはもっと「自分のために生きてほしい」という思いも抱いた。若い今だからこそ、少しわがままで自己中心的に、自分の希望や夢に素直に向き合い、自分が本当にやりたいことに全力になってほしい。社会に出ればどうしても「他人のため」を優先するシーンが多い。自己を主張し、時には失敗を恐れず挑戦することでこそ、真の成長が得られるのだと思う。

3年間の成果を振り返り、高校生たちがさらなる挑戦を続けられる環境を提供したいと強く思っている。机上の知識を詰め込むだけでなく、現場でのリアルな体験、自分の考えを見つめ現実の課題にどう立ち向かうかを学ぶ意味は計り知れない。審査会で見た彼らの真剣な表情、共に助け合い支え合う姿が忘れられない。彼らがさらに自信を持って、現実社会で活かせるスキルや価値観を身に着けていけるような場を作っていきたい。審査会の熱気と緊張感、プレゼンテーションを終えた瞬間の達成感を体感した高校生の姿が示す通り、一度得た自信と経験はその後の人生において大きな支えになるだろう。

(文責：矢野歩実)